第93回麻布獣医学会　一般学術演題14

# スコティッシュフォールドの骨軟骨異形成に対して外科治療・放射線治療・内科治療の併用療法を行った1例

○中條　哲也[1]，一戸　登夢[1,2]，吉岡　千恵[1]，圓尾　拓也[1]，藤田　幸弘[1,2]

[1]麻布大学附属動物病院，[2]麻布大学外科学第二研究室

【はじめに】

スコティッシュフォールドの骨軟骨異形成（SFOCD）は軟骨の成熟異常に伴い、種々の程度の骨変形、外骨腫の形成、ひいては骨関節炎を引き起こす疾患である。本疾患は遺伝性であり、程度の差はあれ全てのスコティッシュフォールド（SF）が罹患していると考えられている。一方、現状で確立された治療法はなく、治療報告そのものが乏しい。これまでに、本疾患に対して外科治療・放射線治療・内科治療を併用した報告はない。

【症例】

4歳、雄（去勢済み）、体重3.2kgのSFが右後肢の慢性的な跛行と右足底部からの出血を主訴に麻布大学附属動物病院を紹介受診した。両足底部とも外骨腫により顕著に腫大し、右側は底側の皮膚が損傷し持続的な出血が観察された。単純X線検査ではSFOCDに典型的な外骨腫形成が認められ、猫種・経過・臨床所見からSFOCDと診断した。外科治療として、足底部切開により外骨腫を露出、減容積を行なったのちに損傷部の皮膚をデブリードして縫合した。その後四肢肢端への放射線治療（RT）及びポリ硫酸ペントサンナトリウム（PPS）による内科治療を行なった。治療後、右後肢足底部の出血及び跛行は改善し、活動性も上昇した。術後341日目の検診において、臨床症状の悪化や顕著な外骨腫の増大、骨関節炎所見の明らかな増悪は認められておらず、飼い主の満足度も高かった。

【考察】

SFOCDは進行性の遺伝病であり根治は困難で、対症療法での管理が中心となる。本症例は当初RTを目的に紹介来院したが、RT単独では外骨腫の顕著な縮小効果は望めず、皮膚損傷部の管理が困難となる可能性が高いと判断し、外科治療を併用した。外科治療として足根関節固定を行った報告もあるが、関節固定は侵襲性が高く不可逆的な処置であり、本疾患に適応した場合の長期予後も不明であることから、本症例では皮膚損傷部の治療に必要な分の外骨腫の減容積のみを行なった。一方、この処置のみでは骨関節炎等に起因する慢性疼痛の緩和は望めないと考え、RT及びPPSによる内科治療を併用し、良好な経過を得た。RTのプロトコルは過去の報告に則ったが、これは人の類似疾患の治療法から外挿したものであり、より良い照射方法には検討の余地がある。RTのみで長期（最長72カ月）の疼痛管理ができたとする報告がある一方で、RTの外骨腫増大の抑制効果は少なくとも完全ではない。SFOCDの最適な治療は個々の症例のプロフィールや重症度により異なってくると考えられるが、本治療法は皮膚損傷を伴ったSFOCDの管理の有効な選択肢の一つであると考えられる。長期的な経過観察が望まれる。